

社会福祉法人 佑啓会



佑 啓

社会福祉法人 佑啓会 ふる里学舎
〒290-02 市原市今富1110-1
☎0436-36-7611
発行者 眞見 吉 英
編集者 三 股 金 利

福祉と効率

鈴木 竹男

施設長の眞見君と高校時代からの友人だった関係で、佑啓会設立のときからお手伝いさせて頂いている監事の鈴木でございます。

一応、経理の専門家ということになってはいますが、普段接しているのは企業の経理ばかりですから最初に社会福祉法人会計というものに出会ったときは正直言って慌てました。その後、眞見君に笑われてはいけないという一心で一所懸命勉強しまして、何とか監事を務めさせて頂いております。その会計ですが、一般企業においてはやはり単なる過去の事実を数字的にあらわすものではなく、その会社の将来を創造するための用具の一つとして利用されています。すなわち、プラン・ドゥ・シーという一連の経営活動の中で予算という形で全社員の行動を規制し、予算と実績の対比という形で各部門ないし各社員の業績を評価することになります。そして、その評価も単なる過去の評価に止まらず、将来の会社の経営活動に役立てられることとなります。一般企業ではこのような一連の活動の中で、血のにじむような努力によってコストダウンを達成してきました。効率が支配するという世界が、果たして人間にとって幸福な世界かという疑問は残りますが、

効率重視の考え方は現代社会のう勢となっていると思います。そうした中で、社会福祉法人の経理に携わってみて感じたのは、このような法人の業績の評価を會計に行うということは非常に難しいということなんです。一般企業では、多額の売上高を計上するということは、それだけ消費者から支持されていると判断できますが、社会福祉法人の主要な収入である措置費収入は入所者の数によって計算されるものであって、これをもつてその法人が入所者及びその家族の方々から支持されているとストリートには言い難いというのが現実だと思っています。また、費用の面をとってみても、本来必要な費用を単に削って浮かせた利益百万円も、職員の努力によってコストを低減して進み出した利益百万円も、決算書からは識別できません。

今後、わが国を含め世界の福祉関連支出は増加していくことになるでしょう。その額がいくらが妥当なのかという点は極めて政治的問題であり、最終的にはその国の国民が決するべき問題であると考えますが、福祉の現場にも市場経済の波が押し寄せてくることになるのではないかと思います。「良い製品をより安く」というのは民間企業のキャッチフレーズですが社会福祉法人の世界にも「良いサービスをより安く」という時代が目の前に迫っているような気がします。(公認会計士)

これから

三 股 金 利



間企業のキャッチフレーズですが社会福祉法人の世界にも「良いサービスをより安く」という時代が目の前に迫っているような気がします。(公認会計士)

中央教育審議会は学校週五日制を目指すべきとのまとめを公表した。こども達にゆとりを：十九日の紙面である。前日、私は通所更生施設の会議に出席していた。会場は小さな分校跡の校舎を利用した通所更生施設「いんば学舎」である。木造のちようど私が小学校時代の校舎の様である。懐かしさとともにこの建物を改修し、認可施設とした関係者の熱意が伝わる。田園風景・ニワトリの声・柵の野菜・ネコの眠るような足取り。過ぎ去りし時代にタイムスリップしたような錯覚と安堵感。

当時、学校は日曜日だけの休みだったけれど、ゆとりを求める気持ちにはなかった。遊びを追いかけたいたせいのなか。時間を埋める必然がなかったのか。

ここでの席上、通所施設の受け入れ時間の延長や土日のサービスをしていくという報告がされた。学校は時間を「ゆとり」のために短縮へ。一方、通所施設は時間の延長を唱え始めた。養護学校はどうなるのであろうか。単純な疑問である。もともと学校は教育の場施設はサービスをする所。根本的な違いがある。数年後、この場と所を効果的に使い分けられるような環境が出来上がるのだろうか。現在でも夏休みの施設利用を希望する数は多いのである。

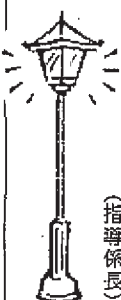
通所施設は養護学校卒業後の活動の担い手として年々増加の傾向にあり、入所施設とは比較にならない。地域生活の柱が通所という形態であるというのなら今後この傾向は続き、この人達を吸収することになる。入所施設よりも重度化傾向にあるということが声高に言われ、更生とはどんな機能なのか、障害の重い人を受け入れ、何をすべきなのかという苦悩も聞かれる。そこには「入所施設には地域生活の可能な人達が少なからずいるではないか」との指摘が見え隠れするのだが、将来の不安を憂う家族の理解を得ることもまた至難の現実。入所施設に対する批判と、育成会の日中活動の保障を求める声を背景に、通所施設への

期待は大きいものと言えよう。しかしながら、前述した時間延長のサービスは各施設の努力に基づくもので、制度化されているものではないことも含まれている。基盤のないサービスが持続できるか心配される。さらに、これらはサービスに対する答えではあるが、ニーズがあるから応え続けることは、また、限りなく入所の形に近づくことに他ならない。

家庭と施設、点と点を線で結ぶ地域の生活を支えるのは、家族の協力と福祉サービスのバックアップと確信する。その体制の脆弱さは否めないものの、学校時代は家庭生活ができ、卒業と同時にそれが不可能となると考えにくい。ふる里学舎は通所部として、入所施設に併設という形をとっている。定員も少ないために単一施設の状況とは異なっているが、それぞれの特徴を活かし、利用して頂けることを理想としている。一施設のできる支援の限界はあるが、各施設の少しずつの努力が実を結ぶよう行政のご理解も切に願いたい。

「こども達にゆとりを持たせることが、これからの複雑な社会を生き抜く力になる」(紙面)かどうかは別として、サービスを提供する側である私達は、利用者に安心感を与える気持ちの余裕はもっていたいと考えて昨今である。

(指導係長)



試合は完全な投手戦。規定時間がきても0対0のまま、延長戦へと突入。そして六回表、ランナーを一塁に置いて、古川君に打席がまわってくる。ライバル同士の対決に、場内の声援は最高潮に達した。張りつめた緊張の中で、ジャストミートした球は二遊間を抜け外野フェンスにまで届いた。必死に走る彼に、一瞬「ゆっくり走れ、故障しているひざに負担がかかる」と思ったが、言葉には出なかった。勝負に懸けた少年の姿を見て心を打たれていたからだ。

熱投
FURUKAWA

結果はランニングホームラン。その裏のマウンドに立つ彼は、選手・コーチ・応援のみんなに支えられながら、彼自身のバットで叩きだした二点を守り抜いた。優勝だ。少し照れ屋で嬉しさを身体一杯に表現するタイプではないが、笑顔でベンチに戻ってくる姿に握手を求める人がしばらく絶えなかった。「準決勝の相手の方が、強かったよ。」表彰式の後、彼の口からこんな言葉が出た。確かに決勝戦は相手チームを0点で抑えたが、準決勝では3点取られている。

人一倍、負けず嫌いで練習熱心な古川君。おとなしそうな顔を見てみるとどこにそんなパワーを秘めているのだと、不思議な感じさえしてしまふ。

さあ次は全国大会だ。

（指導員 平井 晋也）

古川君は、千葉県代表に選ばれ、9月に北海道で開催される
ゆうあいピック全国大会に出場します。

林博樹

今年の四月半ばから毎週水曜日にボランテアをさせていただいています。自分は将来、知的障害等をしていて、その光景がとも自然に感じるできませんでした。

者の施設に就職したいと考えているので学校の先生に相談したところ、このふる里学舎を紹介していただくことができました。

六月四日には、千葉市動物公園への旅行にも参加させていただきました。利用者の方々も非常に楽しみにしていたようで、

ふる里学舎に来てまず感じたことは、利用者の方々の年齢が若く元気で明るいことでした。また、施設内の各部屋が普通の家のようになっていることでした。利用者の方々にとって、この施設は自分の生活の場であり、家であるということをよく考えていると思えました。

ポランティアの内容は、作業を
 として利用者の方々と関わるこ
 とが中心となっています。朝は引
 き離きから参加させていただいて
 今回の参加を通し、人との関わ
 りは一部分だけの姿で判断する
 ことは危険であることも改めて
 感じることができました。

ポランディアという立場で、利用者の内面を伺うには限界も感じますが、そういった努力はこれからも大切にしながら、職員さんと利用者のような自然な関わりが持てるようになればと思います。

どのように声掛けをするかということですが、つい注意をするような声掛けをしてしまうので、自主性を促すような声掛けが必要だと思いました。

林君は、東京成徳大学4年生の学生さんです。汗だくになりながら働く姿は、同年代の寮生さんにも刺激になっている、水曜日を

また、職員さんは一緒に作業を行っているにも拘らず利用者の方々の状態に合わせて的確に声掛け

林博樹

「弱さではなく、強さが本当
やさしさなんだ。」と腰に手
当て私に言った人がいた。純
しさに囲まれて育っていること

「だって、あんなに私は、この人、
難しいこと言ってるけど、なん
か素敵！」くらいにしか思っ
ていなかった。

私に、それだけの人を幸せ
にするか知っている。何故だか
私の周りは優しい人が多い。き

社会の荒波に飛び込み、かろ
 じて浮いている今、その言葉
 重さによりやく気が付いた。
 人がつらい、痛いと感じてい
 くと放つておけず集まるのだろ
 う。環境が人を育てるというが
 それなら私は愛情に満ち溢れて
 いる人間のはずなのだ。

のを可哀そうに思うのではな
自分も同じようにつらいと感
ること。そのつらさを受け止
られることが強さなのだと。
り合つて間もない人達と同じ
うに感じようと思う自体無謀
が、この仕事を始めてから何
思つただろう。私は弱いと。

それはさておき、今はどうし
ようもない私でも、周囲の人に
感謝しつつ、人の痛みが少しで
もわかるよう、ノミの心臓で精
一杯感じて、悩んで成長してい
きたいと願ひながら、このふる
里学舎での毎日を積み重ねてい
きたい。

れど、自分は弱いと認めるこ
がきつと強さへの一歩だと自

指導員 山城 絵美

編集後記

ムシムシした暑い夜になると、思い出すことがある。幼い頃、巨大なクモを見て笑つてしまつたことを……。想像を絶するほど大きかつたら恩を呑むことになるが、想像を越える程度だと、何故かおかしさがこみあげてくるようだ。今思えば、あの時のクモは想像を超える程度のものだつたと気付く。

季節というものは、とうの昔に忘れていたことをふとしたことで思い出させることがある。いつの日か、眼にクマをつくりながら辛い編集作業をしていたことを、四季折々の中で思い出す日は来るのだろうか……

佐啓第十八号をお届けいたします。

堀口 貴宏